

# Newsletter

2020.3.2

立教大学全学共通  
カリキュラム運営センター



## グローバル教養副専攻Discipline Courseに3テーマが新設

### 1. International Cooperation (国際協力人材育成)

提供部局：グローバル教育センター

#### ●テーマの目的

近年、SDGs（※）に関する取り組みが学校・企業・官公庁などさまざまなところで見られるようになり、国際協力分野に関する関心が高まっています。

本テーマでは、「国際協力」について体系的に学びます。具体的には、国際社会が取り組むべき地球規模の課題「グローバル・イシュー」に対応し、解決することができる知識やスキル、グローバルマインドを身に付けることを目的としています。

※SDGs（持続可能な開発目標）

2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された2016年から2030年までの国際目標のこと。持続可能な世界を実現するための17のゴール（右図参照）・169のターゲットから構成されている。



SDGsのロゴ

#### ●テーマの概要

本テーマは、グローバル教育センターが運営するプログラムの1つで、2013年度に開設された、立教大学・明治大学・国際大学による共同教育プログラム「国際協力人材」育成プログラムを発展的に再編成したものです。「国際協力人材」育成プログラムは、開設からの7年間で延べ1,500名が受講しました。

「国際協力」と一言で表しても、その分野は非常に多岐にわたります。本テーマは、国際協力のさまざまな分野を知り、学びを深める機会を提供します。

第2系列、第3系列の科目は、国際協力を知るうえで非常に重要です。「グローバル共通教養総論」「グローバル・イシュー各論」「ソリューション・アプローチ」「アクティブ・リサーチ」は、すべて英語で学ぶ科目です。「グローバル共通教養総論」「グローバル・イシュー各論」の2科目は、2つの異なる視点から国際協力の分野を網羅的に学びます。各分野で活躍するゲスト・スピーカーからのお話を聞く機会、そして英語でのディスカッション、プレゼンなど、充実した学びの機会が提供されます。

「ソリューション・アプローチ」は、科目名にある「開発経済」「人道支援」「強制移転・移住」「紛争と平和」という各テーマをより掘り下げてゼミ形式で学ぶ科目です。

第3系列の「アクティブ・リサーチ」「国連ユースボランティア」は、それぞれ海外フィールドワーク（例：スリランカ、ミャンマー、フィリピン）、海外国連機関等での長期活動（例：カザフスタン、モザンビーク、フィジー）を行う科目ですので、より実践的な経験ができます。これらの科目で訪れる国は、アジア地域や発展途上国が多く、国際協力に関する現状を体感することができる非常に貴重な機会です。

本テーマに関する科目を体系的に履修することで、国際協力に関する理解を深めるとともに、実践的な活動や将来のキャリアにもつながる機会を得ることができます。

履修モデル：<テーマ> International Cooperation (国際協力人材育成) *1			
系列	目的	科目	必要単位数
第1系列	国際社会・文化・多様性への理解を深める	・学びの精神・多彩な学び指定科目	8単位以上
第2系列	国際協力分野の知識を向上させる	・多彩な学び「グローバル共通教養総論」、「グローバル・イシュー各論」など ・多彩な学び指定科目	4単位以上
第3系列	テーマを深く学ぶ	・多彩な学び「ソリューション・アプローチ」、「アクティブ・リサーチ」、「国連ユースボランティア」	4単位以上
海外体験		・第3系列の対象科目 ・課外プログラム等による海外での国際協力分野の体験	認定
修了に必要な総単位数			16単位

\*1 本テーマはグローバル教育センターが提供する総合系科目を中心に履修する。



スリランカでのフィールドワーク

#### ●履修を勧めたい学生

国際協力に興味があり体系的に学びたい、SDGsに興味・関心がある、海外で国際協力の現場を体感したい方に履修をお勧めします。

## 2. Global Leadership (立教GLP)

提供部局：グローバル教育センター

### ●テーマの目的

「リーダーシップ」というフレーズから連想されるリーダーとは、いわゆるカリスマ性があり、皆の上に立ち、先導していく人物のことを指す、と思われる方が多いのではないのでしょうか。しかし、本テーマで学ぶ「リーダーシップ」は、この従来型のリーダーシップとは全く異なる位置付けで考えています。

本テーマではリーダーシップを「権限や立場に関係なく、チームメンバー1人1人が自分の強み・弱みを理解し、ビジョンを掲げて周囲を巻き込み、チームの目標達成に向けて貢献できるスキル」と定義しています。このリーダーシップを身に付けるため、独自のリーダーシップ最小三要素(図1参照)に基づき、「率先垂範」「目標共有」「同僚支援」を意識しながら学びを深めることが、本テーマの目的です。

### リーダーシップ最小三要素



(図1) 立教大学の掲げる「リーダーシップ最小三要素」

### ●テーマの概要

本テーマは、グローバル教育センターが運営するプログラムの1つで、2013年度から開講している全学部生が履修対象となる「グローバル・リーダーシップ・プログラム(立教GLP)」の科目を基幹科目として組み入れ、再編成したものです。現在は年間延べ400名を超える学生が立教GLP科目を履修しており、これらの学生がより体系的に学ぶことができるテーマです。

第2・第3系列に配置された科目が、リーダーシップを学ぶ上で非常に特徴的です。

「GL101」「GL111」は企業が全面的に協力する、PBL(Project-Based Learning)という授業の形態をとります。協力企業から与えられた課題の解決策をグループで検討していく中で、自身のリーダーシップを発見し、実際に発揮していく科目です。「GL201」「GL202」は、「GL101」や「GL111」で学ぶ中で発見した自身のリーダーシップをより高めるために必要な「質問」スキルを修得します。「GL102」は、他者のリーダーシップを開発するために必要な理論と実践について、「GL103」は自身のリーダーシップをより開発するために必要なコミュニケーション手法について学びます。

また、第3系列には、「GL301」「海外インターンシップ」と、海外で実践的な形でリーダーシップについて考え、学ぶことができる科目を複数用意しています。

本テーマを修了することで、立教大学が提唱する「立教型リーダーシップ」を受講生一人一人が発見し、実社会の中でリーダーシップを発揮するための裏付けとなる理論や知識を幅広く身に付けることができます。これらは社会ではもちろんのこと、友人関係やクラブ・サークル活動、アルバイト活動にも活かせます。

履修モデル：<テーマ>Global Leadership(立教GLP) <sup>*1</sup>			
系列	目的	科目	必要単位数
第1系列	自己分析、他者との対話、多様性・文化・コミュニティへの理解を深める	・学びの精神・多彩な学び指定科目	8単位以上
第2系列	リーダーシップの知識・理論を修得し、実践を積む	・学びの精神「GL101」、経営専門科目「BL0」 ・多彩な学び「GL111」「GL102」「GL103」「GL201」	4単位以上
第3系列	英語でリーダーシップスキルを修得する	・多彩な学び「GL202」「GL301」「GL302」 ・「海外インターンシップ2」	4単位以上
海外体験	テーマを深く学ぶ	・第3系列の対象科目 ・課外プログラム等による海外でのリーダーシップ実践体験	認定
修了に必要な総単位数			16単位

\*1 本テーマはグローバル教育センターが提供する総合系科目を中心に履修する。

### ●履修を勧めたい学生

立教大学が提唱するリーダーシップに興味がある、大学生活の間にリーダーシップを体系的に学んでみたい、将来グローバルな環境下で活躍するためのベースを作りたいという想いがある方に履修をお勧めします。現在立教GLP科目を履修している方にもぜひテーマを登録し、体系的な履修をさらに進めてほしいと思います。



ポスターセッション、ディスカッションの様子

### 3. Experience Opportunities in Japan for International Students (留学生向けキャリアと日本語)

提供部局：日本語教育センター

#### ●テーマの目的

このテーマは、留学生が卒業後に日本とつながる領域で活躍する人材になることについての具体的なイメージを持ち、日本語力の向上、日本の社会・文化への深い理解、学部の専門教育とのつながりを意識しながら履修を進めることで、自らの能力を高めることを目指します。

#### ●テーマの概要

第1系列は日本社会・文化への理解を深めたり、自身のキャリア形成について考えたりするための内容を、全学共通科目総合系科目のうち指定された科目や学部展開科目の中から4単位以上、第2系列は日本語力の向上を図ることを目的に、全学共通科目言語自由科目（日本語）から8単位以上、第3系列は留学生にとっての「海外」を日本ととらえて国内でのインターンシップを行うこととし、全学共通科目総合系科目「国際的協働のための国内インターンシップ」や学部展開科目の中から2単位以上、合計で16単位を履修します。

このテーマを選択することで、自身のキャリア形成を意識しながら、全学共通科目や学部専門科目を系統立てて学ぶことが期待できます。また、実地での学習も組み込まれています。学部で学び、専門性を高めるとともに、本テーマに取り組むことで、将来の姿を具体的に思い描く機会を多く持ち、日本の社会・文化とどのような関係を構築するか、そのためにどのくらいの日本語力を身に付ける必要があるかを確認しながら、努力を重ねることができます。

履修モデル：<テーマ>Experience Opportunities in Japan for International Students (留学生向けキャリアと日本語)			
系列	目的	科目	必要単位数
第1系列	日本社会・文化への理解を深める キャリア形成について考える	・多彩な学び指定科目 ・学部展開科目 <sup>*1</sup>	4単位以上
第2系列	日本語力を磨く	・言語自由科目の日本語科目	8単位以上
第3系列	実地での受発信力を身につける	・多彩な学び「国際的協働のための国内インターンシップ」	2単位以上
海外体験		・学部展開科目のインターンシップ <sup>*1*2</sup>	認定
修了に必要な総単位数			16単位

\*1 学部展開科目における履修条件（他学部履修の可否、先修規定等）は、科目設置学部の履修規定等による。

\*2 第3系列・海外体験のインターンシップは、日本語を生かしたものを対象とする。

#### ●履修を勧めたい学生

このテーマはすべての正規学部留学生を履修対象としており、1～2年次生の早期に登録ができるといいと考えています。

どの学生も、入学の動機も卒業後の進路も違うものですが、留学生は、入学前の社会・文化的な背景や、日本とつながったきっかけがより多様です。卒業後、どこで生きるかといったことを考える際に、日本、母国のほかに、日本でも母国でもない場所といった選択肢もあり、進路を見定める際に迷うケースもあります。いざ日本で就職を、と思ったときに、日本の就活事情への理解が十分でなく、思うように行動できないということもあります。卒業後の活躍の場がどこであっても、日本と関連のある場所で活躍することを希望する留学生が、適切なタイミングで判断し行動するためには、日本とつながって生きることにについて考える機会や、自身が思い描く夢を実現させるためにどのような努力を積み重ねていくべきか考える機会が度々あることが必要です。本テーマはそのための仕組みです。

ぜひ本テーマに沿って科目を履修しながら、卒業後に日本とつながる領域で活躍する人材になることについて具体的に考える機会を持ち、日本語力の向上、日本の社会・文化への深い理解、学部の専門教育とのつながりを意識してほしいと思います。

各コース・テーマ概要や科目リスト等の詳細は  
グローバル教養副専攻WEBサイトを  
各科目の履修登録方法は、各学部のR Guide\*で確認してください。

グローバル教養副専攻WEBサイト  
<https://s.rikkyo.ac.jp/rmp>



\* R Guide は 2020 年 3 月 19 日に RIKKYO SPIRIT より公開予定



## 授業探訪

# 「Japanese Studies through English」

2019年度 言語系科目・言語自由科目

担当：印田 佐知子（ランゲージセンター教育講師）

### 1. 概要

1年次の英語必修科目を修了した学生が、継続して英語を学習するために設けられている英語自由科目群の中から、今回担当した「Japanese Studies through English」について紹介させていただく。本科目の目標は、学生が「日本について英語で話すことができる」ようになることであり、その為にどのような方法と内容で授業を展開するかは担当教員に任されている。筆者がどのような授業を行ったのか、多少なりとも参考となれば幸いである。

### 2. 授業の内容

言語教育と文化の関係についての研究で知られるクレア・クラムシュ氏は、文化は無意識に習得されるものであるがゆえに「他者の目を通してこそ自らの文化を知ることができる」と述べた。筆者も、日本人以外の視点を借りて学生たちに日本の社会と文化の特性に気づいてほしいと考え、それを柱に授業を組み立てた。主教材として選んだのは、日本に長年滞在したイギリス人ジャーナリストが、日本社会への戸惑いや賞賛を記した日英文化比較論ともいべきテキストで、読解やディスカッションに用いた。加えて、アメリカ人ライターによる日米文化比較を題材とした短編エッセイ集を、速読やサマリーを述べる練習等に用いた。さらに、ジャパン・タイムズ紙の連載記事も活用した。これは、外国人が日本で目にした驚きのモノや出来事が何なのかを記者に尋ねるという連載で、授業では、例えば「タクシー運転手や警備員が白い手袋をしているのはなぜか」といった外国人による質問をグループに割り当て、それに対する回答と意見を発表してもらった。どの教材も日本文化の長短に気づく良いきっかけを学生たちに与えてくれ、さらに学びを深めるために、日本独自の歴史、宗教観、価値観、美意識などについて解説や動画を加えたり、グループで話し合わせたりした。学期末には、学生各々が抱いた日本の「なぜ」について調べ、そこから得られた学びとともに、今後日本文化をどう継承していくべきか等、自分の考えを発表・執筆してもらった。

### 3. 授業の特徴と工夫

言語自由科目の中でも特筆すべき本科目の特徴は、受講生の多彩な顔ぶれだろう。7つの異なる専攻の2～4年次生の日本人学生に、中国、インドネシア、フランス、スペイン、ノルウェーからの留学生が加わり、教室がさながら小さな国際社会であった。この多様性ゆえに苦勞した点もあれば得られた成果もあった。教材の英語が留学生たちには簡単すぎる一方で、留学生の話すスピードや内容についていけない日本人学生も多く、「難しすぎるので受講を辞めたい」と相談に来た学生もいた。また、積極的に質問し意見を述べる留学生たちに比べ、日本人学生は受動的な姿勢で授業に臨むため、「なぜ日本人は黙ってばかりいるのか」と尋ねに来た留学生がいた。そこで、ディスカッションのメンバーを毎回変えて学生間の壁を取り払う機会を増やしたり、日本人学生が主導的に話さざるを得ない状況（英語には訳しにくい日本語の言葉や表現を留学生に説明する等）を作るよう心がけたりした。学期の半ば頃、辞めたいと言っていた学生は「こんなクラスは他にないので、今は良い機会だと前向きに捉えている」と話してくれた。静かすぎる日本人学生たちを不可解に思っていた留学生は、学期末、「日本人の沈黙」について発表し、その独特なコミュニケーション・スタイルについてクラス全体で話し合う機会を提供してくれた。こうした「他者の目を通して自らの文化を知る」機会が、実際にクラスの中で度々実現した。学期末のアンケートでは、授業を通じて自文化と異文化に気づき、英語で話す自信がついたのは、多文化混合のメンバーに依るところが大きいと多くの学生が記した。多様な学生をまとめ、効果的に学習を進めていく難しさは否めないが、学生たちが互いの違いを受け入れ、グローバル社会の一員としての資質を養う契機となるという点で、クラス内の多様性は大いに歓迎されるべきだということを本授業は認識させてくれた。

## 授業探訪

### 「日本手話4」2019年度 言語系科目・言語自由科目

担当：細野 昌子（全学共通科目兼任講師）

#### 1. 日本手話の特徴

「日本手話」は1～4のレベル別、学期制、週一回の2年コースの言語自由科目として2010年度に開講された。ろう講師がダイレクトメソッドで指導する。手や指、腕を使う手指動作には手話独自の音韻構造〔手の形・位置・動き〕があり、顔の部位動作〔視線、眉、頬、口、舌、首の傾き/振り、あごの出し/引きなど〕が文法を担う。日本手話は双方の動作で構成され、線的構造をもつ音声日本語とは全く異なる立体的な言語構造を有する視覚言語である。

#### 2. 授業の工夫（日本手話4）

日本手話1の初習学生は異なる伝達形式に慣れる所から学習を始め、ろうコミュニティで形成されたろう文化を同時に学ぶ。日本手話の講義はどのレベルも「実技」と「コラム」という二本立てで構成され相乗効果を生んでいる。日本手話4の実技では、文法項目として慣用句、Classifier〔対象物の形・動き・特性を再現する表現技術〕、一人でも役もこなす視覚的ロールシフトなどを導入し、自由に自己表現ができるレベルを目指し指導を行う。Classifierとロールシフトの習得は手話文法のなかでも難易度が高いが、それらの活用によってネイティブサイナーにとって自然で分かり易い表現ができるようになる。さらに習得は手話の範疇にとどまらず一般的なコミュニケーションの豊かさとして反映する。授業ではペア/グループワークなどアウトプットの時間を多くとり能動的な授業運営を行う。特にグループ発表形式で行う「絵本の手話読み聞かせ」や「ディスカッション」ではチームワーク力を発揮し技術的にも内容的にも驚くばかりの成長を見せる。オンラインシステムによる復習用動画およびグループ発表の録画配信は自主学習を促す効果がある。また学習の選択肢の一つとして手話検定試験の受験を推奨している。日本手話4では2級合格レベルを目安とし、毎回DVD教材の活用や語彙テストも実施している。語彙テスト用の動画配信は動画を見る習慣化に功を奏している。日本手話4のコラムでは「ろう者と芸術」をテーマとしている。ろう者の芸術は、デフアートの定義“De’VIA(Deaf View/Image Art)”に見られるように「手話やろう者に対する抑圧への反抗」表現から「ろう者としての受容と誇り」を表現するものまで多様である。デフムービー、ろう演劇、デフポエムなど具体例を取り上げながらろう文化の豊かさを体感してもらい、異文化への理解と多様性を受け入れる視野の広さを育てている。専門分野で活躍中のろう者をゲストスピーカーとして招き、コラムのテーマに沿った講演を実施しているが、「百聞は一見に如かず」の効果をもたらしている。

#### 3. 授業の目標

授業の学びを通し学生が自分と異なる世界に生きる人々の言語や文化を共有し、客観的視野へと発展させ更に学生自身の人生に新しい見方を構築していくことを目指している。また自分の枠を超えたコミュニケーション能力を日本手話の授業で培い、必要な場面で発揮できる力を育むことを目標としている。

### 日本手話4を受講して

文学部教育学科4年 倉橋 里佳さん

日本手話3までに学んだ手話技術をさらに向上させたいと思い、日本手話4を受講した。授業ではクラスメイト同士で教え合ったり発表をしたりしながら、難しい文法も楽しんで学ぶことができた。最終的には手話での絵本読み聞かせやディスカッションを通して、手話での表現が上達したことや自分の意見を表せるようになったことを実感できた。また、実際にゲスト・スピーカーとしてろう者のお話を聞く機会もあり、学習前は馴染みがなかったろう文化に興味を持ち、ろう者と手話でもっと豊かにコミュニケーションを取りたいという思いが強まった。授業での学びを生かして、これからも学習を続けていきたい。

## 授業探訪

### 「企業と社会」2019年度 総合系科目・多彩な学び

担当：藤波 美帆（全学共通科目兼任講師）

#### 1. 講義概要とねらい

本科目のテーマは「企業と市場」であり、企業と市場（マーケット）との関係性に焦点を当て、ヒト、モノ、カネという経営資源を調達する場所である労働市場、原材料市場、金融市場の3つの市場を軸に、実際のビジネスケースを取り入れながら、経営学の理論を用いて、企業活動の基本を理解してもらうことを目的としています。履修者の学部や学年はさまざまであり、学生間での経済学や経営学の知識量の差が大きく、講義レベルをどこに合わせるかが毎年の課題です。近年はアルバイト経験がない学生も多く、いかに実際の企業の状況を理解してもらうかという課題もありますが、講義の合間にグループワーク形式を挟むことで、ある程度解消されます。

#### 2. 講義の進め方

冒頭は課題（詳細は後述）を回収します。課題は平常点の評価材料としますが、学生の理解度の確認にも使うため、何件かをその場で選び教員が発表し、それをもとに前回の講義内容の復習も兼ねたポイント解説を行います。

発表用の回答を選ぶのに5分程度かかるため、その間、学生には、その日の題材に関連する最近のニュース記事（できるだけ学生が知っている製品やサービスを扱う企業のもの）を配布し、黙読させます。後で全員に音読をさせるため、黙読時は、知らない・読めない用語をスマートフォン等で調べたり、周囲の友人に確認することを許可しています。さらに、このニュースを知っていたかを学生に挙手させ、ニュースをよく知っている学生と知らない学生がいること（この差が後述のグループワークでの成果に影響すること）を自分たちで認識させ、日々のニュースを読むきっかけとなるようにしています。その後、ニュース記事の解説を簡単に行い、その日の題材に繋げていきます。

基本は講義形式で、理論と実際の企業例を解説します。ただし、全て説明するのではなく、2～3箇所のポイントについて、グループワーク形式で学生に考えてもらい、コメントペーパーに適宜記入させます。この時はスマートフォン等の使用は禁止しています。グループは席の近いもの同士2～5名程度とし、司会者や記録者を設定し、コメントペーパーには役割も明記してもらいます。ワーク中は、議論の過程や回答を個別に確認し、その場で「惜しい」「本当にこれでよい？」といったコメント形式でおおよその評価を伝え、議論を深めてもらいます。各ワークの時間は10～15分程度で、学生の回答をもとに、模範回答と注意すべき点を解説します。時間に限りはありませんが、学生達に話し合ってもらうことで、実際のビジネスの現場を知らない学生が知っている学生から話を聞いたり、理論を実際のビジネスに当てはめて自分の意見を述べることができ、学生たちの理解促進につながっていると思われれます。大人数の履修者がいる場合、全グループの回答にその場で評価をすることは難しいため、授業内のワークの回数を減らす、もしくはワーク毎にコメントするグループが重複しないよう注意することで対応しています。

最後に、その日のポイントを確認し、課題を出し、翌週提出してもらいます。グループワークや課題を出す際には、テストのように正答を採点することが主目的ではなく、論理的に考えることができているか、グループで話し合って意見をまとめることができるか、授業内容を理解して実際のビジネスに当てはめて考えられるか、友達以外とも話ができるか、といったことを確認するためのものであるということを、毎回学生にも伝えているため、初回はぎこちなかった学生も、回を重ねるにつれ、熱心に関与するようになります。

以上が筆者による講義の進め方の工夫ですが、参考となれば幸いです。

# 【大学教育学会2019年度課題研究集会参加報告】

(2019年11月30日(土)～12月1日(日) 於：エリザベト音楽大学)

教務部全学共通カリキュラム事務室 森園 晴美

昨年11月30日・12月1日に開催された大学教育学会2019年度課題研究集会(会場：エリザベト音楽大学(広島))に参加した。全カリ事務室での勤務年数は長いですが、今回が初めての大学教育学会参加だったため、基調講演や課題研究シンポジウム等はいずれも興味深く聞くことができた。

2日目に参加した「学生の思考を鍛えるライティング教育の課題と展望」では各大学での実践例が紹介された。初年次教育の中にライティング教育を位置付けているが(一部の大学は2年次生に対しても実施)、大学の規模、実施が大学全体か学部毎か、また必修か選択か等による違いこそあれ、大学生の「書く力」をどのように育てていくのか、さまざまな角度から分析・検討が行われ、実践していることが分かった。

正直なところ「大学でのライティング教育」を初めて聞いた時、大学生になって「書く」ことを学ぶのかと不思議に感じた。しかし大学入学後に課されるレポートや卒業論文はその質も高校までの作文と大きく異なり、社会に出ても企画書や報告書等の作成が求められ、大学において「書く力」を身に付ける必要性は想像以上に高い。一方で「書く力」は一朝一夕に身に付くものではなく、書くことを怠ればその力はすぐ衰える。今後は、初年次教育として行われているライティング教育を専門教育とどのように連動させるのか、書く力を身に付けるために必要な思考力・読解力もどのように身に付けさせるのか等、課題は多く残されている。

学会終了後、東京に戻る新幹線の中で自分の大学生時代を振り返った。所属が文学部のためレポート作成や筆記試験で「書く」機会は非常に多く、卒業論文も書いた(しかも手書き)。しかし今回各大学の事例を聞き、自分が書いたものは果たして大丈夫だったのかという思いが卒論指導教授の苦笑した表情とともに頭の中に蘇り、ただただ反省であった。

## 2019年度 全学共通カリキュラム運営センターの主な活動

\*2020年2月現在。3月に開催されるものについては全て予定です。

### <言語系科目構想・運営チーム>

#### ①英語教育研究室

- ・4月3日(水) 英語ディスカッションクラスオリエンテーション  
(池) 太刀川記念館3階カンファレンスホール
- ・4月5日(金) 英語eラーニングオリエンテーション  
(池) 8号館8304、8501教室
- ・4月5日(金) 新任教員オリエンテーション  
(池) マキムホールM201教室
- ・4月5日(金) 春学期FDセミナー  
(池) マキムホールM201教室
- ・12月7日(土) 秋学期FDセミナー  
(池) 11号館A203教室
- ・12月14日(土) 第20回大柴杯スピーチコンテスト  
(池) 8号館8201教室

- ・1月6日(月)～22日(水)

英語自由科目カリキュラムアンケート実施  
実施科目数：87科目

- ・英語力伸長度測定テスト(TOEIC L&R IP)実施  
1年次対象：春学期(プレイスメントテスト)  
4月1日(月)、秋学期 11月30日(土)  
2～4年次対象：春学期 4月13日(土)、  
秋学期 12月7日(土)

#### ②ドイツ語教育研究室

- ・7月23日(火) 春学期担当者連絡会  
(池) 11号館A101教室
- ・2月21日(金) 秋学期担当者連絡会  
(池) 6号館6402教室

#### ③フランス語教育研究室

- ・7月5日(金) 春学期担当者連絡会  
(池) マキムホール第1・第2会議室



- ・12月14日（土）秋学期担当者連絡会  
（池）太刀川記念館第1・第2会議室

④スペイン語教育研究室

- ・7月30日（火）春学期担当者連絡会  
（池）12号館2階会議室
- ・1月27日（月）秋学期担当者連絡会  
（池）太刀川記念館第1・第2会議室

⑤中国語教育研究室

- ・4月2日（火）春学期担当者連絡会  
（池）16号館第1会議室
- ・9月14日（土）秋学期担当者連絡会  
（池）12号館2階会議室

⑥朝鮮語教育研究室

- ・7月29日（月）春学期担当者連絡会  
（池）太刀川記念館第2会議室
- ・1月28日（火）秋学期担当者連絡会  
（池）13号館会議室

<総合系科目構想・運営チーム>

- ・4月4日（木）スポーツ実習科目担当者連絡会  
（池）ポール・ラッシュ・アスレティックセンター  
4階 \*普通救命講習会実施
- ・7月19日（金）2019年度第2回総合系科目担当者連絡会  
（池）14号館D501教室
- ・2月28日（金）2020年度第1回総合系科目担当者連絡会  
（池）マキムホールM201教室

<新任教員対象オリエンテーション>

- ・4月9日（火）人事課主催オリエンテーション  
「全カリについて」井川 充雄（全カリ部長）
- ・3月31日（火）ランゲージセンター主催オリエンテーション（2020年度新任教育講師対象）  
井川 充雄（全カリ部長）

<授業評価アンケート関連>

①言語系科目構想・運営チーム

【報告書関連】

- ・「2018年度授業評価アンケート報告書」作成（2019年12月発行）

【2019年度「授業評価アンケート」関連】

- ・「授業評価アンケート」実施（2019年度秋学期科目対象）  
1月6日（月）～22日（水）  
実施科目数：245科目

②総合系科目構想・運営チーム

【報告書関連】

- ・2018年度「学生による授業評価アンケート」学部等総評の作成
- ・スポーツ実習「2018年度春・秋学期授業評価アンケート集計結果」作成

【2019年度「授業評価アンケート」関連】

- ・「学生による授業評価アンケート実施」  
実施科目数：春学期192科目、秋学期168科目、計360科目
- ・スポーツ実習「授業評価アンケート」実施

<学会・シンポジウム参加>

- ・6月1日（土）・2日（日）  
大学教育学会第41回大会参加  
テーマ「高大接続改革と大学教育」  
小島 緑、丹羽 祥太郎（全カリ事務室）
- ・11月30日（土）・12月1日（日）  
大学教育学会2019年度課題研究集会参加  
テーマ「大学、そして学士課程教育で、どのような人材を育成するかー第4次産業革命とSociety 5.0に向けてー」  
森園 晴美（全カリ事務室）

<シンポジウム>

テーマ：言語科目における日本手話

ー10年のあゆみー

日 時：2019年12月6日（金）

池袋キャンパス 7号館7102教室

プログラム：

- ◆基調講演：日本手話の言語性  
齊藤 くるみ 氏（日本社会事業大学教授）
- ◆事例報告・コメント：  
細野 昌子 氏（全学共通科目兼任講師）  
野崎 静枝 氏（全学共通科目兼任講師）
- ◆司会  
細井 尚子（全カリ言語チームリーダー／異文化コミュニケーション学部教授）

\*本シンポジウム筆録は「大学教育研究フォーラム」第25号（2020年3月発行予定）に掲載

全カリニュースレター No.47

発行 2020.3.2

発行人 井川 充雄

編集人 松山 伸一、中川 理

発行所 立教大学 全学共通カリキュラム運営センター